

花柳界における芸者の変容

——「商売」と「仕事」ということばの使用に関する一考察

中岡志保

1 はじめに

かつて全国的に散在していた芸者とその社会である花柳界は、昭和という時代が終わる頃にその姿を消してしまったか、かろうじて存続してきたというのが現状である。そうした消滅寸前の状況から、近年では芸者が足りない日もあるほどに座敷数を取り戻した¹⁾ V花柳界²⁾は希少な存在である。このV花柳界に筆者はひとりの芸者として登録し、2007年4月から2008年9月までの1年半、フィールドワークを行った。V花柳界は関東に位置し、当時18名ほどの芸者が現役で座敷に出ていた。置屋^{おきや}は休業中の6軒を含めた18軒が見番に登録していた。しかし実質的に機能している置屋は、稼働していると見番に届け出ている置屋12軒のうち7軒であった。

V花柳界が繁栄した時期は、昭和30年代と言われ、その当時は100人以上の芸者が在籍していたと聞いている。しかしそれをピークに、昭和50年代以降は芸者数が激減していった。60歳以上の芸者は、V花柳界の華やかな時代とされる30年代に活躍していた世代である。

調査時点のV花柳界は、60歳以上の芸者が4名、50歳代、40歳代がそれぞれ1名いるほかは、30歳代、20歳代が全体のおよそ7割を占めている。しかしこの世代の女性はしばしば入っては辞めていく傾向にあった。芸者志望の若い女性を受け入れているのが、筆者の所属した置屋、春ノ家の春花お母さんである。

40歳代の春花お母さんは、お座敷のことを「仕事」と呼んでいた。お母さんを筆頭に春ノ家に所属する芸者、つまりお母さんの「娘」たちは誰もが、芸者とは「仕事」だと認識し、そう呼んでいた。他方、V花柳界の古参であり、芸妓組合長でもある70歳代の光代姐さんは、一貫して「商売」ということばを使っていた。

これらの「商売」と「仕事」ということばは、ともに芸者の生業を指して使用されているにもかかわらず、世代によって明確に呼ばれ方が区別されている。こうしたことばの違いは、時代の推移と平行に、何らかの価値観の変化が認められるかもしれない。

ジャン・ボードリヤールは、消費社会では歴史的な事実の儀式的、もしくは戯画的な再現がみられるが、それらからは時代錯誤的な消費で満たされた構造が読み取れると述べる。その過程で現実世界は否認され、消費という名の記号に変えられてしまう。そうした一連

の流れは歴史学においてネオ、または復古と呼ばれるという [ボードリヤール 1979: 133]。そればかりではない。消費社会は、ルシクラージュによって「現代性」の支えられた社会であるともいう。ルシクラージュとは、「誰でも左遷されたり取り残されたり排除されたりしたくなければ、自分の知識や学力つまり労働市場における個人の「実戦用装備」を時代の動きにあわせて更新しなければならないことを意味」する [ボードリヤール 1979: 135-136]。

今日の花柳界もしくは芸者も、時代の流れとともに確実に変わってきている。それが世代ごとに「商売」と「仕事」という異なったことばを使用する状況として現れているのだろうか。だとすると、現在の V 花柳界はルシクラージュされた、復古もしくはネオ芸者とそれ以前の芸者との接触領域、コンタクト・ゾーン [Pratt 1992: 田中 2007] とは言えないだろうか。コンタクト・ゾーンとは「まったく異なる文化が出会い、衝突し、格闘する場所である」 [田中 2007: 31]。しかし V 花柳界は、これまでの人類学がフィールドとしてきた「伝統社会」であるとともに、ワイルド・サイドもしくは裏街道としての、第 2 の意味でのコンタクト・ゾーンでもある [田中 2007: 33]。それが「商売」と「仕事」というふたつのことばに現れているとは言えないだろうか。

本稿では V 花柳界の事例をあげて、ふたつのことばに現れている、花柳界に生じた何らかの変化について考察を行う。

2 「商売」と「仕事」の違いが現れた事例

まず、「商売」と呼ぶ70歳代の光代姐さんと、「仕事」と呼ぶ30歳代の泰江姐さんとの世代による、ことばと感覚の相違が具体的に現れた事例をあげてみたい。

事例1 70歳代の光代姐さんと30歳代の泰江姐さん

筆者が、置屋の先輩にあたる30歳代で芸者歴4年目の泰江姐さんと、70歳代の光代姐さん、入って半年も経っていない20歳代の友香の4人で入ることになっていたお座敷の日である。この日の出先は遠方の料亭であったため、見番からタクシーでお座敷開始の1時間前³⁾に出発することになっていた。少し早めに見番に着くと、光代姐さんはすでに座って待っていた。泰江姐さんは光代姐さんと一緒の座敷であったことを知って少し焦っているようであった。なぜなら今日の座敷は自分が一番上だと思いこんでいたのに、実際は大きい姐さんが一緒だと知ったからである。大きい姐さんとする座敷では、不作法を注意されることが多々あり、それがないことは若い芸者にとって気楽なことであった。

見番でタクシーを待っている間、泰江姐さんは光代姐さんに色々話しかけ、光代姐さんはそれに応じていた。そうしているうちに、泰江姐さんは見番の事務員に「ねえねえ、6日のお座敷は誰の〔客の名前〕席？それから8月にわたしの仕事が入ってる日を教えて」と尋ねながら見番の事務机に置いてある予定表を覗きみた。それをみていた光代姐さんは「昔はそんなこと聞いちゃいけなかったんだよ。そんなこと芸者が

言ったら叱られてたよ。自分の客なら別だけどさ、誰かに入れてもらってる席に誰と一緒に入るかなんて〔見番の人には〕教えてもらえなかったんだよ」と泰江姐さんを正した。光代姐さんは「それから、仕事じゃないんだよ。商売。これ〔芸者を指して〕はお商売って言うんだよ」とも続けた。泰江姐さんは無言のまま渋い顔をしていたが、タクシーに乗ると何事もなかったかのように光代姐さんに話しかけていた。

光代姐さんが「〔今日の座敷に〕呼んでくれたのはあんただったのかい」と、その日の座敷でお客さんに言っているのを筆者はたびたび聞いていた。そのため事例1に現れているように、泰江姐さんの態度が芸者には好ましくないものだと感じるのも無理はないと感じた。

しかし、見番の事務員に自分が呼ばれている座敷について質問する行為は、春ノ家ではお母さんをはじめ、置屋の娘たちにとっては当然なことであり、そのついでに誰と入るのかなどといった質問をする行為も普通であった。どの座敷で踊りの要望があるのかを聞いて、その座敷に向けて演目の準備をしていく必要があるからである。V花柳界を利用するご最良さんは、小さな座敷ではなく大きな舞台のある会場で宴会を開催するとき芸者を呼ぶことが多い。そして利用する客は決まっているため、芸者と客は月に何度も顔を合わせることになる。そうしたことへの配慮として、芸者は踊りの演目が重ならないように心掛けていた。

こうして置屋の娘たちには、自分のスケジュールを管理することと芸をいくつか身につけておくことが暗黙のうちにお母さんから義務づけられていた。そうした自己管理ができていなかったことで娘がトラブルをおこすと、それは今後改めなければならない問題としてお母さんから厳しく注意されるか、座敷がもらいにくくなるという結果につながっていく。

筆者がV花柳界に入って1年経ったある日のスケジュールをあげてみよう。この日は朝9時に自宅から自転車で10分程度離れた置屋近くの美容院に行き、1時間程度で髪を結ってもらう。その後自転車でやはり10分程度離れた小唄の稽古場に向かい、10時30分から稽古をつけてもらう。V花柳界は昭和50年頃から、見番での稽古を行わなくなっていた。そのため、芸能の稽古が再び盛んになった近年では、師匠の構える稽古場に芸者各自が出向かなければならないのである。その後一度置屋に戻り、バスで片道20分程度離れた長唄の稽古場に向かう。1～2時間後に置屋に戻り、自転車で帰宅し、14時前後に昼食をとる。その後自宅で、稽古してきた三味線のおさらいをし、座敷の始まる2時間前に置屋で夜の座敷の支度を始める。

この日は19時から座敷が入っていたので、17時に置屋に行って支度を始める。踊りの稽古以外は洋服で行うため、座敷の支度までは洋服である。それを脱いで和服を着る。自分の支度だけではなく、置屋で支度をしている他の芸者の着付けも上の姐さんから手伝っていく。筆者は先に着物を着るが、化粧を先に終わらせて着付けをする者もあり、そこは自由である。支度が終わると座敷までに軽く夕食をとっておく。そして座敷開始の20分前に置屋から出先へと向かう。最初の座敷は「お約束」と呼ばれ、2時間と決まっている。そ

のため21時には一度解散したが、「お約束」の後に入る「後口^{あとくち}」と呼ばれる座敷にも、二次宴会として呼ばれ、場所を替えて22時30分まで入った。宴会が終わった頃、姐さんに携帯電話で呼び出され、22時45分から0時15分まで3つめの座敷に入った。その後、置屋に戻り、着替えをして帰宅した。

この日のように夜中の0時前後まで後口に入っていることも珍しくはなかった。こうした座敷でお酒を飲み過ぎて醜態をさらすようなことにでもなれば、芸者としての認識不足、または自己管理を怠った結果だとして、厳しくお母さんや上の姐さんから注意される。

3 世代ごとの時代背景

第2章でみたように、20歳代から70歳代までの、半世紀の開きのある芸者が同時にひとつの座敷に入るのが花柳界である。そのため、座敷においては当然双方に感覚の相違が生じることも多々ある。そのため、世代ごとにどのような時代的経験を背負って花柳界での日々を過ごしているのかを理解する必要があるだろう。本章ではそれを踏まえ、「商売」を使用する光代姐さんと「仕事」を使用する春花お母さん、そしてそれ以下の世代がそれぞれ芸者になった経緯、当時の様子、考え方などについて比較してみることにしよう。

3-1 「商売」を使う世代——光代姐さんを中心として

3-1-1 芸者になった理由・芸者生活

光代姐さんがV花柳界に来たのは昭和20年の終わり頃で17歳のときである。その理由として、「家は貧乏でよ、お母さんもいなかったからよ」とある座敷で説明していた。芸者になったのは経済的な理由であり、18歳のときに初めて旦那がついたという。姐さんは関西の出身であるが、昭和20～30年代にV花柳界にいた芸者はみな地元出身ではなく、地方からやってきた娘たちばかりだったという。そのとおり、現在V花柳界にいる70歳代の姐さんのなかで地元出身者はいない。そして全員が10代で芸者になっている。「私が来た頃はここにも100人からいたんだから。賑やかなもんだったよ」と語る。

光代姐さんとは別の、10代で半玉^{はんぎょく}としてV花柳界に出た70歳代の芸者は、半玉であっても振袖などは着せてもらえず、芸者と同じ格好で座敷に出ていたという。その理由は所属していた置屋が貧乏で、半玉の支度ができなかったからであった。半玉とは関西の花柳界でいうと舞妓のような存在で、半人前の芸者という意味がある。関東では、芸者の稼ぎのことを玉代^{ぎょくだい}と呼んでおり、その稼ぎが見習い中である半人前の芸者は半分しかもらえなかったことにその名の由来があると言われている。今日では半玉は舞妓のような格好をして座敷に上がるのが一般的とされているが、それは近年の話なのである。そして当時のV花柳界の芸者は、置屋に住み込んで生活しており、芸者の出向く待合が決まっていた、客もひとつの待合にしか行かなかったという。そのため、特定の客に決まった芸者がつくという形式が定着していた。

交通手段といえば輪タクという自転車タクシーで、もとは人力車を引いていた商店が花柳界の指定地内で営業していた。輪タクは隣町にある遊廓で遊んでいる客に呼ばれたとき

などに利用した。当時は次の待合に行くのにぞうりを履く暇もないほど忙しかったという。

3-1-2 昭和30年代の花柳界の様子

長年 V 花柳界に通っている80歳代のご最良さんは、戦後の頃を振り返り、「V 花柳界には芸者に客をとらせる置屋もあった。この辺りは青線地帯だった」と語る。昭和34年の『法律時報』のなかに、「売春防止法施行前は、8、9割の芸者が売春婦と同様であったことは、周知の通りである」[下光 1959:37]とあり、当時は芸者が売春を行うのが当然とみなされていたことが窺える。別の70歳代の男性も、「そのこの角の置屋の芸者はみな客をとっていたよ。昭和50年代頃だけど」と語っていた。V 花柳界では昭和50年代頃まで売春が密かに行われていたのかもしれない。

昭和35年の V 花柳界指定地内の地図を、花柳界の組合に所属しているお寿司屋さんの旦那が描いており、それをコピーした紙を小唄の師匠や数名の芸者が持っている。その地図では、ほとんどの建物が置屋か待合、料理屋など、花柳界に関する店舗となっており、話に聞いていた、芸者衆の利用する大きな風呂屋や髪結床も1軒ずつ含まれている。それらの花柳界に特有な店は、今はもうない。地図に関して特筆しておくならば、その他に1軒だけキャバレーが描かれていた。

3-1-3 お座敷に対する感覚

光代姐さんは春花お母さんに触れて、置屋のお母さんなのだから言うことはちゃんと聞かなければならないということや、置屋のためにしっかり稼ぐようにといったことを筆者に忠告した。そして現在のような V 花柳界の活気を取り戻してくれたことについては、感謝しているようであった。しかし、大きな舞台で踊りを披露するような宴会形式の座敷を定着させたことに関しては、仕方ないとは思いながらも、あまり快くは受け入れられないといった感じであった。なぜなら宴会形式の座敷に対して、物足りなさを感じているからであった。

光代姐さんにとってお座敷のダイナミズムとは、座敷でいかにお客さんを話芸によって楽しませることができるかにある。そのため、姐さんと一緒に入った座敷で筆者はいつも、男女の恋愛感情も含め、人と人が会話もしくはそれにふくまれる「情」を交わす場であることをしみじみ感じた。「言霊」とでも言うのか、ことばで座敷を操っているような、不思議な感覚である。それは宴会では味わえない、客が今何を欲しているのかということ、つまりお酌をする速度から会話で使用することば一語に至るまでに、全神経を集中させなければならぬ精神修養の場であると感じた。

3-1-4 芸に対する感覚

芸の稽古に関する話題が上ると、かつては見番に都内から一流の師匠が来てお稽古をつけてもらっていたということや、30歳代で芸者歴10年の姐さんはしばしば語る。その当時の見番には大きな舞台が備えてあったため、そこでおさらい会なども開催していた。そして都内の一流の舞台で開かれる、流派のおさらい会にも出ていたと聞く。しかし筆者が

V花柳界に入った当初、春花お母さんや小唄の師匠から、大きい姐さんと呼ばれる60歳以上の姐さん方は芸ができないと聞いていた。そしてV花柳界に入ってきた若い女性は一様にそう思っていた。

筆者がV花柳界に入って半年ほど経った頃、「本当に三味線がうまくなりたいんだったら、長唄をやるのがいいね、本当ならね」と光代姐さんから忠告された。その時に光代姐さんは三味線を弾いていた人なのだと感じた。なぜなら長唄は三味線の指や撥さばきの上達に最も有効であると花柳界で言われていることだからである。そのため光代姐さんは芸ができないのではなく、芸をしないのではないかと筆者は感じた。

光代姐さんは芸をしないと先ほど述べたが、正確に言えば、一度だけ座敷で都都逸を唄っているのを聞いたことがある。その座敷後に、筆者は芸を教えてもらいたいと姐さんに言った。すると「芸は教わるもんじゃないんだよ。盗むもんなんだよ。だから私も教わったことなんかひとつもないよ」というこたえが返ってきた。光代姐さんの言う芸の内容は、筆者が教わりたと言った芸の意味とは異なっていると言えるだろう。姐さんにとっての芸とは、客を楽しませるための遊びのなかに見出すものであり、話芸とも切り離せないものである。

他方、筆者が使用した芸ということばが指す意味は、春ノ家の娘たちも共有していることであるが、踊りや三味線、唄など、いわゆる邦楽を指すものであった。そしてそれは春花お母さんと日々、置屋で交わす会話のなかで内面化してきた感覚であった。しかし光代姐さんの芸と芸者との感情のなかに見出すもの、つまり光代姐さんが「商売」と呼ぶ内容は、踊りのような具体的な芸を売るのではなく、抽象的なものを指しているのである。それは、光代姐さんが一度だけ言った「夢を売る」ことを意味していた。

3-1-5 大きい姐さんとしての権威

今日のV花柳界は、地域に唯一残る花柳界として地元のメディアに登場することもしばしばである。しかし光代姐さんは、芸妓組合長であるにもかかわらず、ほとんどメディアに現れることはない。しかし、その年の祭りでのどのような行動をとるかといった決定権と、V花柳界の土地の権利に関わる所有権を持っていた。正確に言えば、その土地の権利は大きい姐さんの代までしか持っていないことは確かなようである。だが、入会地をめぐる権利の所有者の不明さなどの問題が絡んでいるようで、全容について若い芸者衆ははっきり分かっていない。それだからより一層不透明な実態となっており、伝説として若い芸者衆の話題にごく稀に上った。明確には分からないことだからなおさら、若い芸者衆は目にはみえない権威として、大きい姐さん方の存在を認めていた。こうした話題はさらに、大きい姐さん方に睨まれたらおしまいだ。なぜなら、V花柳界で古くから権力を持つお客さんが姐さん方の後ろにはついていからだと拡大して受けとられていた。こうして、大きい姐さん方は、花柳界の古さと結びついたひとつの権威として、若い芸者衆から認識されていた。

3-2 「仕事」を使う世代——春花お母さん

3-2-1 芸者になった理由・芸者生活

春花お母さんはV花柳界のある町の、普通のサラリーマン家庭で、昭和30年代中頃に生まれ、育った。高校卒業後はデパートに勤務していたが、デパートを退職し、料理屋でお運びを始める。その料理屋の座敷でお運びをしているときに、春花お母さんがかつて所属していた置屋のお母さんにスカウトされた。それがきっかけで芸者になった。20歳になったばかりの頃であったという。当時は、あまり芸者のことをよく知らなかったの、具体的な仕事の内容は分かっていなかったし、芸にとくに興味があったというわけではなかった。そして芸者になることに対して、父親から猛反対されたという。お母さんが入った頃のV花柳界には、大きい姐さん以外、若い芸者はお母さんの所属する置屋と、他の置屋に1人程度しかいなかったと語る。

お母さんは芸者になる前に、10代で結婚し子どもを1人儲けている。その後すぐに離婚し、子どもは父親に引き取られた。それについて、「自分は結婚もしたし出産もしたけど、今の道を選んできたの。でもそれは捨てたんじゃないの。ひとつを選ぶってことは、もうひとつを犠牲にすることだけど、こっちを選んだから今があるの」と言い、自身は離婚したが、芸者とは芸を売る仕事なのだから、結婚しても出産しても一生続けていける職業だと、きっぱりと語る。

3-2-2 昭和の終わり頃の花柳界の様子

春花お母さんが芸者になった昭和の終わり頃のV花柳界は、先述の昭和35年の地図のまちなみに近い形で黒塀の料亭が花柳界の指定地内の道を挟んだ両脇に立ち並んでいたという。しかし、立ち行かなくなった料亭は取り壊して駐車場にするか、建物を何でもいから貸し出して家賃収入だけでも得たいという思いから、あらゆる業種に貸していった。その結果、現在は待合や料理屋にまじって、風俗店や韓国系のパブなどが立ち並ぶようになっていく。料理屋に呼ばれて入ったある日の座敷で、筆者は客から、その料理屋の斜め前で営業しているピンクサロンは、自分が30年前にこの料理屋に来たときにはすでにあつたと聞いた。つまり、昭和50年頃にはすでにV花柳界の指定地内には、花柳界関係以外の風俗店が営業していたことが窺える。こうした時代に春花お母さんは芸者を始めたことになる。

お母さんの強力なご鬣さんは70歳代の地元出身の事業主であるが、お母さんと宴会で知りあうまでは、V花柳界の存在など知らなかったという。お母さんが芸者になった昭和の終わり頃は、宴会と言えはバンケット全盛期だった。また接待や遊びではクラブやスナックを利用するほかに考えがなかったともいう。このご鬣さんは現在、お母さんや置屋の娘たちとともに小唄を習っている。

3-2-3 芸に対する感覚

お母さんがV花柳界に入った頃は、小座敷での宴会が多く、あまり芸をする姐さんはいなかった。座敷はというと「芸はできなくても、まあこれが今までやってきたやり方だ

からというのが、なあなあになっていて、その悪習慣をそのまま続けているようなところ」であった。

お母さんが春ノ家という置屋を持つ前に所属していた置屋では、三味線の稽古をすることを光代姐さんと同世代の米子お母さんが嫌がったため、隠れて練習をしていたという。なぜ嫌がったのかについては、彼女が三味線を弾けなかったから、知らないことを身につけていくのは、自分が彼女の手の届かないところに行ってしまうようで嫌だったんじゃないかとお母さんは語る。そしてそのときに、自分は芸でお客さんを楽ませる芸者になりたい。もしも自分が置屋を持ったら、芸達者な女の子を育てていきたいと思ったのだと続ける。

お母さんは日々の稽古を続けていくことで、今日では芸達者とわれ、V花柳界の売れっ子になっている。自身がそうなることで、小座敷からホテルや宴会場などの大きな舞台へと活躍の場を広げてきた。しかしそれはV花柳界が一度ダメになっていたからできたことだと語る。衰退しきっていたことで、それまでの決まりごとを受けついでいなくてもよかったのである。

今では春花お母さんはさまざまな邦楽の腕前を身につけており、通常の座敷では地方と^{じかた}呼ばれる三味線を担当しているが、^{たちかた}立方として踊りを披露することもある。舞台上での芸には責任とプライドを持っており、あるときは「お寿司屋さんのお席でブルーシートを広げて踊ったことがあるわ。足袋なんか真黒になっちゃって。でも芸者はどんな場でも、そんなのは嫌って言うんじゃないくて、お客さんに喜んでもらうために芸を披露するのね」と語っていた。

筆者が初めてV花柳界に見学を訪れたとき、春花お母さんは、筆者が他の花柳界で芸者としての経験があるということを踏まえて、「うち（の花柳界）はしろうとの集団なのよ。それでもいいかしら？」と筆者に語っていたが、実際にフィールドワークに入ってみると、お母さんは一流の踊りを踊る芸者としてのプロ意識の持ち主であり、娘たちにもそれを求めているということが次第に分かってきた。しろうとは、水商売ではないという意味で使用されていたのである。

3-2-4 座敷に対する感覚

置屋にお抱えの芸者が増えてくると、座敷に出ないで置屋を営むことに専念する芸者もいるが、お母さんにはその考えはないようであった。そして前の日の座敷でどんなに酔いつぶれて帰っても、朝6時には起床し、三味線の稽古をしたり、座敷の準備をしたりするのが日課であった。さらに風邪をひいて熱があっても座敷を休まず、疲労骨折をしたときでさえ舞台に穴をあけなかった。座敷に対するこのような感覚は、座敷がない日々を経験しているお母さんにとって、座敷が毎日あることがあたりまえではないことや、人から信用を得て、それを持続することのむずかしさを経験していることなどが背景にあった。

お母さんは春ノ家という置屋以外にも、待合を置屋の建物の1階で置屋の開業と同時に開いていた。その他2005年頃に閉じた置屋を買い受けて、芸者衆を呼ぶことのできる料理屋として出店していた。どの娘を日々どの座敷に入れるかを定めるほかに、置屋以外に経営している店や、その従業員を管理すること等を含めたものが、経営者としてのお母さ

んの「仕事」であった。

3-3 「仕事」を使う世代——娘たち

3-3-1 芸者になった理由・芸者生活

春ノ家の娘たちの多くは、インターネットや雑誌などで流されるV花柳界の情報を得て、自ら芸者を志望してやってくる。そして芸者になった理由として一様に芸に興味があったことをあげる。芸を身につけることが芸者の使命だと感じており、クラブやスナックのホステスと自分たちとは違っていると感じている。彼女たちの語りからは、水商売の世界に入ったという感覚の薄さを感じられる。

娘たちは一様に一般的なサラリーマン家庭に育っており、片親であるとか、祖母や母が芸者であったと語る者はいなかった。家族からの反対を受けたり、もしくは芸者をしていることを隠していたりする者もいる一方で、半数は親が賛成し、応援さえしていた。そうした親の応援は、「親々会」なる会の結成により、具体的な活動となって現れていた。

春ノ家では、お抱えの芸者が随時10名前後で推移していた。2007年時点の娘の最終学歴は、30歳代4名、20歳代6名の10名のうち、中卒1名、高卒1名、短大・大卒5名（筆者を含む）、不明3名であった。ただし中卒1名に関しては、舞妓や芸妓の育成を目的とした教育施設である学校法人の学園を卒業しているものの、高等学校に定められた必須科目とは内容が大きく異なっているため、高卒扱いにはならないというものであった。不明3名に関しては、在籍しているものの、ほとんど座敷に出なかった者や、筆者が入ってから間もなく辞めたなどの理由で確認できなかった者である。

春ノ家の芸者の学歴をみると、大卒者が最も多くなっているが、それは花柳界に入ってくる年齢も高くなっているということを示している。20～30歳代で入ってくるのが普通であり、お母さん同様、前に就いていた職を辞めて芸者に転職している。筆者がフィールドワークを行った1年半の間に、およそ10名ほど入っては辞めていったが、そのうち別の仕事との兼業で入ってきた女性もおり、写真のスタジオ勤務、女優などであった。そうした女性たちは、アルバイト感覚で入ってくることが多い。だが芸の稽古を重視するV花柳界では、どんなに美人であっても踊りのひとつも踊れなければ座敷がもらえない。そのため、自然に辞めていかざるを得ない傾向にあった。

数年間、芸者を続けている者の前職は、ダンサーやバンケットの接客係、別の地域の芸者であった者、名取の舞踊家、銀行勤めなどのOL、弁当屋のアルバイトなどさまざまであった。芸者を辞めてV花柳界から去っていく者の理由としては、結婚、転職などであった。転職では、資格を取って福祉関係の職に就くという理由を数名があげていた。

娘たちは花柳界付近に家を借り、自宅から置屋に通ってきて、そこで座敷の支度をするのが一般的である。なかには3、4駅離れた町に住み、JRで通ってくる芸者もいる。そしてお稽古には隣町までバスで通う。お座敷が遅くなりそうであれば、電車の最終がなくなるからと客に断って早めに座敷を抜け出す芸者もいる。1970年代の関東、ことに東京ではすでに芸者は通いの形式を取っていたようである〔ダルビー 1985:165〕。それが定着したことも起因してか、地元出身の芸者も増加傾向にある。

3-3-2 現在の花柳界の様子

現在のV花柳界のまちなみは、黒塀の待合の立ち並んでいた面影を留めていない。かつての待合の建物は、先述したように韓国系の料理屋やスナック、風俗店に利用されているか、取り壊して駐車場になっている。そして夜には風俗店のピンクや黄色、青色などのネオンがきらきら光っている。

近年、V花柳界のまちなみを昭和30年代の情緒ある景観に戻すための整備が開始され、花柳界関係の店以外の風俗店なども、外壁を黒く塗って花柳界との連続性を持たせたり、石畳による道路整備によって画一的な清潔感が創り出されたりしている。そして虫の被害によって切り倒された柳並木が花柳界のまちなみには欠かせないと考える春ノ家の一部の娘たちにより、復活のための募金活動が行われている。そのお金から苗を買って植樹してもらった柳の木が、現在徐々に増えてきている。こうした花柳界の風情を復活させたいという娘たちの思いは、春花お母さんと同様のものである。

3-3-3 芸に対する感覚

現在の見番は建物の大きさも機能も、最も賑やかだった頃に比べるとかなり縮小している。また芸者の減少によって都内の師匠を呼ぶこともできなくなった。そのため、芸者各自がどの芸を稽古するかを決め、その芸の師匠の稽古場に直接通っている。それは昭和30年代の花柳界とは異なり、公共交通機関の整備によって可能となったことである。見番で稽古が行われていないものの、春ノ家の娘たちは芸に興味があって芸者になったということを一様に語っており、熱心にお稽古に通っている。

娘たちがまず身につけなければならないのは踊りである。三味線の習得には時間がかかるため、座敷で三味線を弾くことが許されているのはお母さんだけである。そのため、座敷が重なることによって生じる地方不在の座敷に備えて、曲を吹き込んだカセットテープとカセットデッキを娘たちは持ち歩いている。その曲に合わせて踊りを披露することが、春ノ家の娘たちの持ち芸となっている。

3-3-4 座敷に対する感覚とお母さんの権威

芸をやりたいと言って芸者になった娘たちにとって、お母さんの座敷に臨む姿勢や芸の捉え方は当然のものとして受け入れられていた。そのため、お母さんは娘たちにとってはひとつの権威であった。光代姐さんの言うとおおり、置屋のお母さんの言うことは、娘ならば聞かなければならないということは当然の理由である。だがそれに加えて、春ノ家の娘にとって、お母さんは光代姐さんが忠告する以上の権力を持っていた。

先述したように、今日のV花柳界において、主たる座敷の形式は踊りを披露する宴会形式になっている。そして春ノ家に所属している娘は踊りの善し悪しによってどの座敷に入れるかをお母さんが決定する。そのため、娘が座敷に多く入れてもらうためには、お母さんの考える基準を満たした踊りを踊らなければならなかった。その基準は芸の師匠の基準ではなく、お母さんの基準であった。逆に言えば、お母さんから承認を得さえすれば、娘である限りは自分の顧客を獲得しなくても座敷が確保されるということである。こうし

たお母さんに対して娘たちは、お母さんの決定が自身の座敷数の増減に影響を及ぼすものであり、収入と関わってくる問題であるため、経済的な権威を感じずにはいられなかった。

上述した「商売」と「仕事」という異なることばを使用する、世代間の認識の相違を踏まえ、次章では「商売」と「仕事」ということばの意味の変遷を追い、芸者稼業を指す「商売」について考えてみたい。

4 「商売」と「仕事」

4-1 辞書に見る「商売」と「仕事」の意味の変遷

本章では、表1に「商売」、表2に「仕事」をそれぞれ辞書から抜き出してまとめた。そこから読み取れることについて触れてみたい。

ここにあげた辞典・辞書はそれぞれ、江戸：『江戸語辞典』、M28：明治28年第6改版発行『日本大辞書』、M45：明治45年発行『大辞典』、T6：大正6年10版『大日本国語辞典第2巻』、S4：昭和4年修正6版発行『大日本国語辞典』、S18：昭和18年153版発行『辞苑』、S27：昭和27年新訂1155版発行『広辞林』、S34：昭和34年発行『新言海』、S44：昭和44年第2版発行『広辞苑』、S59：昭和59年第3版発行『広辞苑』、H20：平成20年第6版発行『広辞苑』である。

『江戸語辞典』を除く辞書の選定にあたっては、山田忠雄が『近代国語辞書の歩み——その模倣と創意』のなかで、明治維新を迎えても「旧幕時代刊行書の重版・印行されるものは殊の外多く（中略）最初の10年は、それら江戸時代の旧版の再摺書が主として読書界の需要を満したものと考えられ、簇出した群小の辞書の体例の如きも一に其等に倣ったものと思われる（後略）」[山田 1981:5]、「凡そ辞書出版とは畢竟ずるに、創意一分、模倣九分の愚著を氾濫させる謂にほかならぬ」[山田 1981:6]と述べていることを踏まえ、著者も可能な限り出版された辞書の内容に目を通したうえで、大きな違いはないものと判断し、版を重ねて出版されているものを中心に扱うことにした。

『江戸語辞典』の特徴は、「江戸時代に使用例のある語を収録」した「引用が主役の辞典」である[木下 1991:iv]。このことから、江戸期の「商売」や「仕事」ということばの使われ方が分かる資料として、参考としてあげた。本章では便宜上、文章中に記載する辞書の名称等は省略し、明治28年第6改版発行『日本大辞書』であればM28と表記することにした。

それでは、ふたつのことばの変遷についてみていきたい。まず表1にまとめた「商売」ということばからみていきたい。M28からM45への過程において、「売り買いしての営業」という説明から「商品売ること」となり、T6には「商業」などという説明が加わるなどの変化がみられる。このことから、ものの売り買いに関することばであることが分かるだろう。また語法に目を移すと、その行為やそれを業とする人の状態を指すことばにほとんど変化がないことがみて取れるだろう。S44から俗に「仕事」という意味が加わったものの、語法はさほど増えていないことから、その影響はあまりないものと思われる。

「商売」ということばにおいて注目したいのは、江戸時代からその語法として「商売上

表1 辞書における「商売」に関する説明の変遷

商 売	
江戸	㊦ 商売上がり：以前芸娼妓であった人。〈浮世風呂二上〉文化「商売あがりだから大かた子も出来めえし」
M28	①あきない。=売り買いしての営業。②すべて、営業、または職業。 ㊦ 一上、一手、一屋、一人
M45	あきなうこと。=商品を売ること。○転じ俚言。職業と通用する語。 ㊦ 一上、一足掻、一敵、一気、一人、一冥利、一向、一屋、一往来、一往来にない商売
T6 S4	①商業。殊に売買に対する商業の称。あきない。うりかい。売買。②職業。営業。③芸娼妓などの業。 ㊦ 一上、一方、一氣質、一敵、一柄、一気、一手、一鉄砲、一人、一物、一屋
S18	①あきない。うりかい。②営業。職業。③芸娼妓などの業。 ㊦ 一上、一方、一氣質、一敵、一柄、一気、一人、一向
S27	①あきない。うりかい。とりひき。(売買)。②営業。職業。③芸娼妓のよすぎ。 ㊦ 一上、一方、氣質、一敵、一柄、一気、一人、一向、一屋
S34	①あきない。うりかいのこと。商業。商法。②営業。職業。③芸娼妓などの業。 ㊦ 一上、一往来、一女、一気、一敵、一柄、一人
S44	①あきない。うりかい。商業。「一物」②俗に、職業。仕事。③芸娼妓などの業。「一女」 ㊦ 一上、一往来、一氣質、一敵、一気、一人、一向、一屋
S59	①あきない。うりかい。商業。「一物」②俗に、職業。仕事。③芸娼妓などの業。「一女」 ㊦ 一上、一往来、一氣質、一敵、一気、一人、一向、一屋
H20	①あきない。うりかい。商業。「一繁盛」②俗に、職業。仕事。③芸娼妓などの業。 ㊦ 一上、一往来、一女、一氣質、一敵、一柄、一気、一道具、一人、一向、一屋

がり」があり、「芸娼妓などの業」を指していたことばであるということである。光代姐さんはそのことを踏まえて使用していたのだろうか。

次に表2にまとめた「仕事」ということばの説明についてみてみたい。T6から【理】として物理の意味が加わってくるが、本稿との関連が薄いので、その記載については紙幅の関係で省略した。

「仕事」も江戸時代からすでにその語法があったように、古くから使用されていることばであることが分かる。しかし、その概念はやや今日とは異なっているように思われる。「商売」ということばの概念が、今日までさほど変わっていないのに比べると、「仕事」のそれは大きく変わってきていると言える。そこで変化した内容について時代背景との関連を通してみていきたい。

まず、M45の説明には、「英語の Nork に対する語」という記載がある。これは Work の誤りであると思われるが、西欧の概念が維新と同時にもたらされることによって変化しつつある社会の、ひとつの現れではないだろうか。M45には、「会社」ということばが明治に入ってつくられた造語だということも記されている。

その後、「仕事」に変化が現れ始めるのがS18で、「職業」という説明が記載されている。「職業」をひいてみると、その語法に「職業婦人：一定の職業に就き、その職業から受ける給料によって独立の生計を営み、または家計を補助する婦人。女子俸給生活者」という記載があり、「俸給生活者」が増加傾向にあることを窺うことができる。⁵⁾

S44以降、「仕事」からは「はりしごとの略」という説明がなくなり、「業務」というこ

表2 辞書における「仕事」に関する説明の変遷

仕事	
江戸	〔法〕仕事師：土木・建築工事の仕事をする，労務者・人足など。町火消の兼業が多い。〈浪花聞書〉文政「手伝 <small>つた</small> （*江戸の一のこと，大工の手伝なり）」
M28	①為ること。=事業。②はりしごとの略。 〔法〕一師，一場，一箱
M45	すべて，することがら。=しわざ。○はりしごとの略。=裁縫。○前々の転。たくらみ。=たくみ。 ○物理学の語。英語の Nork に対する訳。すべて，一物体が或る力をうけて其働く方向にはたらいいた称。 〔法〕一著，一師，一箱
T6 S4	①なす業。する事。しわざ。いとなみ。②はりしごと（針仕事）の略。③【理】一物体に… 〔法〕一唄，一師，一高，一高払賃銀，一場，一箱
S18	①なすこと。する業。職業。②はりしごと。裁縫。③ work 一 〔法〕一唄，一着，一師，一高，一高払，一場，一箱
S27	①なす事。する業。しわざ。いとなみ。②〔Work〕【理】物体が…③はりしごと。裁縫。 〔法〕一唄，一著，一師，一場，一箱，一高，一高払
S34	①なすこと。なすべき業。職業。事業。作業。操業。②針仕事。③物体に… 〔法〕一唄，一着，一師，一場
S44	①する事。しなくてはならない事。特に，職業・業務をさす。②【理】外力が働いて… 〔法〕一唄，一着，一高，一高払，一場，一箱，一始，一率
S59	①する事。しなくてはならない事。特に，職業・業務をさす。「一に出かける」「針一」②事をかまえてすること。また，悪事。③【理】外力が働いて… 〔法〕一唄，一給，一師，一高，一場，一箱，一始，一率
H20	①する事。しなくてはならない事。特に，職業・業務を指す。「一に出掛ける」「針一」②事をかまえてすること。また，悪事。③【理】力が働いて… 〔法〕一唄，一収め，一柄，一関数，一着，一給，一口，一算，一高，一の原理，一場，一始，一率

とばに置き換えられている。S44 と言えば、「商売」ということばに俗にはあるが「仕事」という意味が加わるようになった頃である。こうした変化の時代的な背景として考えられるのは、昭和30年頃からの高度成長である。

以上のように、ふたつのことばの概念が時代とともに変容してきたことから分かることは、ともに江戸期から使用されていたことばではあるが、明治の産業革命以降、「仕事」ということばは社会変容に伴い変化してきたのに対して、「商売」ということばは「物の売り買い」に関することや、「芸娼妓などの業」など、限定的な意味として現在でもほとんど変わることなく使用されているということである。

4-2 商売人=くろうと

古い辞書で「商売」の意味を調べていると、意味の後に派生語がどの辞書も同じように並んでいた。「商売」という語は「仕事」とともに、派生語の多いことばである。こうしたことから、当時の生活とは切り離せないことばであったことが窺える。

「仕事」の派生語は、T6 には「仕事箱=大工の道具などを入れ置く箱」などのほかに、時代とともに日雇い労働者が増加してくるにしたがってつくられたと思われる、「仕事高払賃銀=労働時間の長短に拘わらず、其の仕事の出来高に応じて支払う賃銀」なども加わ

っている。しかしここで筆者が注目したいことばは、「商売」の派生語である。

まず、「商売上がり」についてみてみたい。このことばは芸娼妓の業を指して、江戸期から使用されているということは先述したが、そう呼ばれることには深い意味があるようである。M45に「以前客商売をしていたその後の身であること」とあるように、「商売」とは以前何をしていたのかが一生つきまとうことばなのである。それは、『江戸語辞典』の説明にもあるように、たとえ芸娼妓から足を洗って結婚したとしても、子どもができていく身体になってしまったからかもしれない。

筆者が修士課程で調査を行った広島県瀬戸内海の島嶼部（現在は半島部）には、かつて潮待ちで栄えた港とともに遊廓があった。現在では遊廓建物が観光の目玉となっている。その町にも、江戸期から売春防止法が適用される昭和33年まで、正確にはそれ以降もしばらくは娼婦がいた。彼女たちのうちの数人は、町の男性と結婚してそこに留まっている。2004年の9月時点で3名いると聞いたが、その女性たちにはみな子どもがいないとも聞いた。こうしたことから、当時の娼婦の身体は、避妊や性病予防の技術の未発達な状況下において、今日以上に妊娠しにくい身体にならざるを得ない危険にさらされていたのではないだろうか。

次に表1では使用していない辞書、昭和8年発行、昭和15年第93版発行の『新訂大言海⁶⁾』をみると、さらに興味深い記載がある。「商売上＝先きに、芸娼妓、又は茶屋女などをなしたるものの、其れを^や廢めて、^{しろうつ}素人となりたる人」という一文である。このなかで使用されている「素人」に対応する語として、別の辞書では「くろうと」も見受けられる。大正10年発行、昭和7年の『言泉 日本大辞典⁷⁾』に記載された「商売人＝芸妓・娼妓などの総称。くろうと。(しろうつに対して)」がそれである。これらからは芸娼妓は「くろうと」という異名を持っていたということが分かる。T6ではそれぞれ「素人＝芸娼妓に対して、普通の女の称^{くろうと}」、「黒人＝芸妓・遊女などの称」と説明してある。こうした意味から察すると、「くろうと」に対置するのは、「しろうつ」であり、そのいずれかのカテゴリしかなかったともとれなくない。

つまり女性は社会において、「商売人＝くろうと」か「しろうつ」もしくは「商売上がり＝しろうつ」のいずれかに属していたということができるとはならないだろうか。ここで一生「しろうつ」の者と「商売上がり＝しろうつ」の者との間にどのような違いがあったのかという疑問がわいてくる。上述した瀬戸内海の島嶼部の事例では、明らかに「しろうつ」の女性たちは彼女たちの語りのなかで「商売上がり＝しろうつ」の女性に配慮の念を示していた。女性たちばかりでなく、男性たちも同様であった。こうしたことから、何らかの異なる感覚を抱いていたということは言えるものの、具体的にそれがどういうものであるのかについて筆者はまだ把握していない。それに関しては今後の課題としたい。

5 小説『流れる』にみる花柳界

上述した、くろうととしての芸者としろうつとを、きっぱりと対比させている小説に、幸田文の『流れる』がある。この小説は、作家自身が柳橋の花柳界で女中をした経験から、

花柳界の女中を主人公に、芸者置屋の日々を描いた作品である。昭和30年1月から1年間、『新潮』に掲載され、その後小説として新潮社から出版された。また、その後すぐに映画やラジオドラマ、新派の舞台でも取り上げられているところを見ると、当時の人気ぶりが窺える。しかしこの小説は、この時代だからこそ、しろうととくろうとの対比が描けたのであって、現代の花柳界であればおそらく成立し得なかったであろう。

『流れる』で描かれている時代は、ちょうど光代姐さんがV花柳界に入った頃と重なっている。そこで本章では、光代姐さんの語りの背景として、当時の花柳界が社会的にどのような存在であったのかについて、小説から読み取れる事柄についていくつか取りあげてみたい。

5-1 『流れる』におけるくろうと

繰り返しになるが、幸田文の小説『流れる』[幸田 1958]では、最初から最後まで、芸者と女中とが、くろうととしろうとという対比によって描かれている。主人公である女中は自身をしろうとと自称し、芸者を、というより花柳界全体をくろうとの世界として捉えている。それによってしろうととくろうととの違いを明確に区別しているのである。しかしくろうとという異名を持つ限り、芸者はしろうとからみて何らかの技に長けた存在なのではないだろうか。それでは芸者は、何に精通した女性を指しているのだろうか。そのこたえがこの小説には書いてある。

結論を急げば、芸者当人は、清元をやるのが「稼業の表看板」だと言い張っているが、「一般しろうとの観かた」からすると「酒間の円滑油的介添業を芸妓の表看板としている」のであって、開き直ってそう言われると「冗談云っちゃいけない。表看板は芸妓で、そのかげに清元名取があるんじゃないか。清元でごはんをたべてるんじゃない、といった気が急に起きる」[幸田 1958:235]という部分がそれである。そこには、「日常茶飯のこととして」、「徐々に倒れ、美しく崩れ、こころよく乱れて行く」[幸田 1958:74-75]という表現にみるように、客と性関係を結ぶことも含まれている。それによって身体に色気が浸みこんだ者＝くろうととして、しろうとはみているというのである。

また、金の価値もくろうとはしろうとと異なっている。「しろうとの金はばかで、退屈で、死にかかってゐる金であるし、くろうとの金は切ればさっと血の出るいきいきした金、打てばぴんと響く利口な金だとおもふ。同じ金銭でも魅力の度が違ふ」[幸田 1958:61]という。芸者＝くろうとは身体が商売だという前提がなければ、こうした感覚はわからないのではないだろうか。しかしそうしたしろうととくろうととの境も、この時代にはすでに薄らいできていると、小説はくろうと＝芸者に語らせている。

5-2 売春の強要による警察沙汰

『流れる』のなかでは、どこの花柳界とは記載されていない。だが、「橋向こうの芸者屋は格がさがるが」[幸田 1958:174]という記述からは、下町辺りの格のさほど低くない花柳界であることが想像できる。現在であれば格の高さを自認する花柳界ほどクレームをつけそうなものであるが、この小説の上述したような盛況ぶりからすれば、当時の花柳界

では、格の高い花柳界においてさえも、売春の強要が存在することが自明のこととされていたのかもしれない。

小説は、主人公が置屋に女中勤めに入ったその日から、借金を踏み倒して逃走したお抱え芸者の叔父と名乗る男が、少年保護法や売春法を楯に、売春強要で訴えるなどと置屋の主人をゆすっている場面から始まる。そしてその一件が解決し、女中である主人公の次の身の振り方が決まるところで終わる。物語は男のゆすりに奮闘する、置屋関係者の人間模様が柱となっている。小説のなかでは、お抱えの芸者の借金がどのように増えていくのかについても触れられている。

お抱えの芸者は、置屋に出入りする商人から直接商品を買うのではなく、置屋の主人が商品を購入したことにする。その商品は、置屋からお抱えの芸者に売られることになる。つまりお抱えの芸者が置屋に支払わなければならない中間マージンがそこで発生することになる。商人は主人に商売をさせてもらったことで割りかえしをし、主人は商人から手数料を取る、ということで商人と置屋ともに利益を得るしくみになっている。こうして抱えられている芸者の置屋への借金は嵩んでいくのである。このような借金に関するしくみは、当時の花柳界であればどこでも一般的であり、貧しい女性を安価に受け入れ、大金を稼ぐシステムによって花柳界は支えられていた⁸⁾。しかしそれも、売春防止法の適用によって、また高度経済成長の始まりによって急速に先細りに向かっていく。この作品はちょうどその過渡期の花柳界を描いたのである。

5-3 お金を稼ぐ場所 = 花柳界

5-1 にあげたくろうとのしろうとの差異にしても、5-2 にあげた売春の強要にしても、いずれも花柳界という場所が、そこで暮らす芸者にとってはお金を稼ぐ場所だからこそ生じる差異もしくは問題であることが分かるだろう。そして現在でも花柳界がお金を稼ぐ場所であるということに変わりはない。

幸田文は『流れる』のなかで主人にこう語らせている。「とにかく何の商売でも時代後れになっちゃ立ち行かない。古いまんまの芸者ではどこか片意地だし、さうかと云って、どこをどうすれば新しい芸者ができるんだかわからないし、私たち古株もけふ試験に来た¹妓も、實を云へばくろうと・しろうとの²堺も知らなければ、職業と遊びとの堺もわからないんだわ。みんなめちゃくちゃで中途半端なんだわ」[幸田 1958:87]。そしてこう続ける。「このごろはどうも違ってきたとおもふの。芸者はしろとさんに押されてるみたいだわ。著るものも髪のかたちも芸ごとも、芸者特別のものはなくなったでしょ？」[幸田 1958:88]。これらは作家自身が、実際に花柳界に身を置いて感じたことであろう。

今日、芸者の仕事着としての着物は、あまりしろうとの着るものと変わりが無いと言われている。また、実際に春ノ家ではそうしたものを選んで購入している。芸者を志望してやってくる女性に、水商売の世界に入ったという意識が薄いのは、そうした日々身につける着物の趣味も影響するのかもしれない。

花柳界が今も昔も変わらず玉代を稼ぐ場ではあっても、かつてと現在との花柳界を比較してみた場合、大きな差異が生じているとすれば、それは芸者になろうとする女性の生育

環境にある。かつては身を担保に、言いかえれば置屋に身体をあずけ、自身が売れたその稼ぎで借金を返済し、借金が無くなったときに晴れて自由の身になることができた。

それが今ではひとつの職業として、一般的なサラリーマン家庭で育った女性が憧れをもって芸者になりたいと言ってやってくるようになった。筆者が所属していた春ノ家は、お抱え芸者が10人前後で推移する大所帯の置屋であった。そして置屋の看板や着物など借りたものの一切の費用として、玉代の半分が差し引かれる。しかし支給されるもう半分の玉代はそのまま芸者当人のものになる。そのため、芸者は着物を買うお金や着物の維持費などを支払わなくてもいいことになっている。ただし、娘たちは当人の稼ぎからお稽古代や髪結、足袋などを買うお金を支払う。だが、それらは確定申告の際に税務署から経費とみなされるため、稼ぎが少ない者は、ちゃんと出納帳に記録し、申告しさえすれば、税金が返ってくる。

V花柳界の玉代は、芸者ひとりにつき6,000円であった。2時間であれば12,000円を客は芸者ひとりに支払うことになる。なお、2008年以降は1時間につき6,500円と玉代が値上がりした。2時間がお約束と決められていたため、たとえ1時間しか客が芸者を必要としなかったとしても、客は2時間分の保証をしなければならない。後口は30分刻みで玉代が支払われることとなる。このようにあらゆるお金の動きが可視化され、また保証されるようになったのが、今日のV花柳界である。

6 考察

春花お母さんは昭和の終わりに料理屋のお運びさんから芸者に転身してからというもの、旧態が存続されてきたV花柳界に身を置くなかで、自分が置屋を持ったらこの状態を変えていきたいと思ったのだと語った。しかしそれは、しろうとがくろうとの社会に入ってきたからこそ感じた、しろうとの覚えた違和感だったのではないだろうか。それはお金を稼ぐ場である花柳界において、何を売ってお金を得るのかに関わる問題であった。

売春が行われなくなり、一時の勢いを失っていた、もしくは春花お母さんのことばを借りれば、ダメになっていた花柳界において、一芸者としてお母さんが復古した売りは芸であった。そして、芸者の表看板としての芸を不動のものにすることに成功したのである。それはネオ芸者の誕生であり、大きな芸者文化の「ルシクラージュ」であった。そこには、身体を売ることを余儀なくされる家庭の子女がいなくなった経済成長の恩恵と、即時的な情報発信を可能としたインターネット社会の到来をみいだすこともできるのではないだろうか。

花柳界における「商売」とは、芸者の身体そのものを等価で売ることが前提とされていた時代の感覚を表していることばであり、「仕事」とは身体に付与される付加価値を売っているという現代の芸者の自負心が表れていることばとも言えるのかもしれない。つまり、時代の流れによって芸者当人の考える「売り」は大きく変わったのである。そうすると現代の花柳界は、生まれ育った時代の価値観を内面化したふたつの世代が接触し、双方が葛藤を抱き続けながら生活する場、コンタクト・ゾーンと言えるだろう。

注

- 1) 花柳界では座敷というとき、空間を意味することもあるが、「仕事」や「予約」を意味することのほうが多い。「今日はお座敷が入っているの?」と問いかけられたとき、それは「仕事」の予約が入っているのかと問われたことになる。
- 2) V花柳界は、料理屋、料亭(待合)、置屋の三業で構成されている。そのため三業地とも呼ばれることがある。三業地は、見番がなければ正式には成り立たないと言われている。見番は、三業を取り仕切る事務所としての機能を果たす。
- 3) 芸者が呼ばれて出向く場所。料理屋や待合(料亭)のことを指すが、近年では宴会場やホテルなどもV花柳界の芸者のおもな出先となっている。
- 4) 使用した辞書・辞典はそれぞれ、江戸:大久保忠国・木下和子編,平成3年『江戸語辞典』東京堂出版。M28:山田美妙著,明治25年第1版発行,明治28年第6改版発行『日本大辞書』明法堂。M45:山田美妙著,明治45年発行『大辞典』嵩山堂。T6:上田萬年・松井簡治著,大正5年初版発行,大正6年10版発行『大日本国語辞典第2巻』富山房。S4:松井簡治・上田萬年著,大正5年初版発行,昭和4年修正6版発行『大日本国語辞典』富山房。S18:新村出編,昭和10年発行,昭和18年153版発行『辞苑』博文館。S27:金沢庄三郎編,大正14年初版,昭和27年新訂1155版発行『広辞林』三省堂。S34:大槻文彦著・大槻茂雄増補,昭和34年発行『新言海』日本書院。S44:新村出編,昭和30年初版発行,昭和44年第2版発行『広辞苑』岩波書店。S59:新村出編,昭和30年初版発行,昭和59年第3版発行『広辞苑』岩波書店。H20:新村出編,昭和30年初版発行,平成20年第6版発行『広辞苑』岩波書店である。
- 5) 俸給生活者の現状や増加に伴う問題については、日本俸給生活者組合聯盟教育出版部編1927『俸給生活者に訴ふ』マルクス書房。
- 6) 大槻文彦著,昭和8年発行,昭和15年第93版発行『新訂大言海』富山房。
- 7) 落合直文著,芳賀矢一改修,大正10年発行,昭和7年発行『言泉 日本大辞典』大倉書店。
- 8) この時代に活躍していたジャーナリストの神崎清は、芸者の売春問題について言及している。たとえば1954「芸者」『中央公論』。

参考文献

- 木下和子 1991 「刊行にあたって」大久保忠国・木下和子編『江戸語辞典』東京堂出版, pp. ii-iv。
幸田文 1958 「流れる」『幸田文全集 第6巻』中央公論社, pp. 3-257。
下光軍二 1959 「芸者の売春」『法律時報』31(9):938-942。
田中雅一 2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」『Contact Zone』1:31-43。
ダルビー, ライザ 1985 『芸者——ライザと先斗町の女たち』(入江恭子訳) ティービーエス・ブリタニカ。
藤目ゆき 2005 『性の歴史学——公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版。
ポードリヤール, ジャン 1979 『消費社会の神話と構造』(今村仁司・塚原史訳) 紀伊國屋書店。
山田忠雄 1981 『近代国語辞書の歩み 上——その模倣と創意と』三省堂。

Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writings and Transculturation*. London: Routledge.